

## 「鹿児島の地域医療に貢献したい」と助成対象者 ～はやぶさプランで会長らと意見交わす～



産科後期研修医、初期臨床研修医と記念撮影

鹿児島県医師会が創設した医師・助産師・看護師不足対策基金「はやぶさプラン」の助成対象者と県医による意見交換会が8月23日午後7時から県医師会館3階中ホールで開かれた。4回目の交換会には、助成対象者33人(助成者総数は46人)と学校関係者、指導教官、県医からは、池田琢哉会長、野村秀洋副会長、林芳郎副会長、鹿島直子常任理事が出席した。

池田会長は冒頭の挨拶で、「この基金の多くは、民間の方々からいただいた。鹿児島の医療を支えて欲しいということ、理解してもらったうえで、多額の浄財をいただいている。以前の医師不足対策基金と合わせ、1億8千万円ほどの基金を寄せていただいた」と述べたあと、「これからの少子高齢化の時代には、ドクター中心の医療ではなく、働き方改革としてもチーム医療がますます重要になってくる。私のところは小児科の病院だが、看護師さんの支援がないとやっていけない。これからは、医師、助産師、看護師の連携をさらに密にして、鹿児島の医療を守っていかねばならない」と強調し、結び

に「この基金は今年度で終わることになるが、この5年間、使命感をもって働きたいという方々の支援になったと思う。皆さんには地域医療への情熱を鹿児島のために尽くしていただきたい」と要望した。

助成金の交付式では、医師代表の鬼ヶ原幹久氏(鹿児島大学病院)、助産学生代表の前島友恵氏(鹿児島医療福祉専門学校)、看護学生代表の松崎杏果氏(仁心看護専門学校)に池田会長から目録が手渡された。

交付式のあとは、意見交換と懇談に入り、指導教官と助成対象者がはやぶさプランへの思いと、地域医療に懸ける決意を述べた。和やかな雰囲気の中にも、助成対象者の医療への情熱が会場全体に



助産学生・看護学生と記念撮影

伝わるような交歓の場となった。

はやぶさプランは、環境整備や生活支援を通じて、鹿児島の地域医療を担う人材を確保し、育てるのが目的で、より地域性の強い産科医、助産師、看護師を中心とした基金の活用を目指している。

平成28年4月から助成を始めており、助成額は医師月5万円、助産学生・看護学生は各3万円。期間は1年。民間からも多額の基金が寄せられ、基金の総額は8,154万7千円(令和元年8月末現在)となっている。

この日出席した助成対象者の皆さんの発言から(順不同 敬称略)。

### 医師

#### 鹿児島大学産婦人科

鬼ヶ原幹久(産科後期研修医)「川内市民病院でも研修してきた。産婦人科医になるなかでの助成は、教科書の購入をはじめ、生活する上で、とても役立っている」

尾辻葵(産科後期研修医)「大学は岡山だったが、地元ということで鹿児島大学で研修している。産科には学生時代から興



決意を述べる産科後期研修医

味があった。地元は枕崎で、妹がその産婦人科で生まれている。地元で貢献できるよう頑張りたい」

萬浮帆波(産科後期研修医)「助成金は生活する上でとてもありがたい。先生や先輩からの頑張れという熱いメッセージだと受け止め、日々精進していきたい」

東友梨子(産科後期研修医)「出身は福岡だが、大学から鹿児島で今は産婦人科に入局している。研修を奄美でやったが、誰よりも地域医療をやったという研修だった。これからはずっと鹿児島で働くつもりだし、鹿児島の地域医療に貢献できたらと思う」